

『日本アジア研究』第12号(2015年3月)

初めて帰省したのは母の死の直前 ——ハンセン病療養所「菊池恵楓園」聞き取り——

福岡安則*・黒坂愛衣**

ハンセン病療養所「菊池恵楓園」に暮らす80歳代男性のライフストーリー。
杉野芳武(すぎの・よしたけ)さんは、1931年3月、熊本県生まれ。1942年9月27日、菊池恵楓園に入所。この11歳で母に連れられて恵楓園にやって来たとき、彼は子どもながらに入所を拒否して“脱走”している。ところが、再度母親に連れられて「門をくぐった」彼は「もう外に出るのが怖くなった」と語る。彼が生家の敷居を再び跨いだのは、母危篤の連絡を受けた1979年のことであった。37年間も彼の生家への帰省を阻む目に見えない力が、「癩／らい予防法」下のハンセン病療養所には作動していたということであろう。

2001年のハンセン病違憲国賠訴訟の熊本地裁での原告勝訴のあと、2003年になって、熊本県内の黒川温泉で恵楓園入所者への宿泊拒否事件が発生。その町は杉野さんの生まれ故郷であった。自治会役員としてこの問題に対処した当事者の視点から、事件の顛末を詳しく語っていただいた。——恵楓園にやって来たホテルの総支配人の“謝罪文”の受取りを入所者自治会が拒否する場面が全国放送で流され、その後、入所者たちに対する誹謗中傷の手紙や電話が殺到した。杉野さんの語りによれば、ホテルに総支配人を訪ねたときは、宿泊拒否は「本社の社長の判断だ」と言い張っていたのが、恵楓園に来たときは「お断りしたのはすべて自分の判断」で押し通したのだという。心からの反省、謝罪を微塵も感じ取れなかったがゆえの、入所者たちの反応だったのだ。

聞き取りは、2011年3月15日、菊池恵楓園の自治会室にて。聞き手は、福岡安則、黒坂愛衣、足立香織。聞き取り時点で、杉野芳武さんは、80歳。2010年、杉野かほるの筆名でおつれあいの杉野桂子さんと『エッセー集 連理の枝』を上梓。囲碁はアマ6段の腕前で、赤旗主催の棋戦では熊本県代表となって全国大会に出場したこともある。短歌を詠み、随筆も書き、アマチュア無線も楽しむという多才のひとである。

2012年12月8日、原稿確認。2014年7月に恵楓園を再訪したとき、白板の7月の予定表には、入所者自治会の志村康会長、稲葉正彦副会長とならんで、恵楓園を訪ねてくる小中学生相手の説明役として杉野芳武さんの名前も書かれていた。ハンセン病に対する偏見差別をなんとかしてでもなくしたいという強靱な意志が、かれらの活動を支えているのであろう。

なお、〔 〕は聞き手による補筆である。

キーワード：ハンセン病、隔離政策、ライフストーリー

* ふくおか・やすのり、埼玉大学名誉教授、社会学

** くらさか・あい、東北学院大学准教授、社会学

本稿は JSPS KAKENHI Grant Number 22330144, 25285145 の助成を受けた研究成果の一部である。

阿蘇の村に生まれて

〔わたしは〕1931年3月〔の生まれ〕です。80歳になったばかり。傘寿（さんじゅ）かな。

〔熊本県内の〕阿蘇〔がふるさと〕。それこそ〔入所して〕今年で69年になるんだけど、去年の1月頃だったかな、ふるさとの町に行き、はじめて、「自分はこの町の出身だ」ということを話したんだけどね。南小国町（みなみおぐにまち）っていうところです。例の、黒川温泉の宿泊拒否事件があったところ。

〔うちは農業でした。〕おれが覚えてる時分にね、小さな放牧場なんかあって。入会権（いりあいけん）って、ほら、その権利のある人たちはぜんぶ、その放牧場に牛馬（うしうま）を〔放牧できる〕。うちも牛小屋〔があって〕、どこの子でもそうだけど、もう小学校に入れば、ぼちぼち、牛馬（うしうま）の〔世話をする〕。それこそ餌を作ったりね、そういった放牧場に引いていったりな。朝飯前には、朝草刈りって言いよったけど、そんなのを刈ったりして。〔でも〕うちは小さな百姓だった。女と子ども〔だけ〕だからね。

〔父親は早く亡くなりました。〕食あたりだったですね。親父はあんなとき、60ぐらいだったかな。私が7歳。おふくろも親父も、両方ともね、再婚同士なんですよ。別に、それぞれ子どもを置いて、また杉野家をつくったような形です。だから、うちの部落では、いわゆる新参者（もん）だな。それから一生懸命〔働いて〕、田んぼでも、畑でも、山なんかもね、持とった。「あそこがうちの山だけな」ということは、おふくろから聞かされとった。

〔小学校のときは〕普通の、悪がきですよ。そして、やっぱ、〔この〕病気になる体質（あれ）だったのかなあ。体格もこまかったからね。そして、3月生まれだけ、俗に言う早生まれでしょ。〔4月生まれの子とは〕1年違いますからね。〔運動なんかは〕苦手、苦手。〔運動会でも一等賞になったことは〕ないですねえ。やっぱ、体力的にはだいぶ違うですよ、1年違うと。近所のおばさんたちが「かわいそうにねえ」ちつてから言いよったもん。それば、まだ子どものときのことだけど、覚えてますね。

〔勉強は〕できない。でも、おふくろが無学だからな。〔おふくろは〕小学校4年生ぐらいまで行ったのかなあ。やっど、ひらがなでね、いろいろ書くぐらいで。あんまり手紙なんか書けなかったもんね。詳しい、細々（こまごま）したことはね。そのせいもあって、「学校には行っとかにやいかん」「小学校だけは出とかないかん」ちゅうことは、よお言われよったけど。なんぼ言われたっちゃ、あんまりわからんからね、〔勉強は〕嫌いだった。

小学校の一斉検診から、大学病院、そして恵楓園へ

〔恵楓園へ来たのは〕11歳のとき。ここへ入るきっかけになったのは、学校の一斉検診でわかったんだけど。ちょっとね、いま考えればですよ、眉毛が薄かったのかなあっていうぐらいです。だから、後になって考えてね、校医は町医者だけど、よう、田舎の、あの町医者がわかったなって思って。おそらく経験があったのかな。当時は、わりと患者も巷におっただろうからな。そういう経験がないと、簡単にはわからんはずだけど。

〔校医は〕わたしには直接言わなかった。学校の担任の先生に言ったんですよ。それからおふくろ〔に〕ということになるけど。「ちょっとおかしいから、大学〔病院〕に行ったほうがいいんじゃないか」というふうな、どうも

話があったみたいです。そして、大学に行って、大学から恵楓園にまわすと。それが〔1942年の〕9月ごろだね。——医者は自分が診てもね、診断は下さんわけですよ。いま考えてみれば、そうたい。やっぱり、「〔癩〕予防法」の関係です。手続きがいろいろあるじゃないですか。消毒したりとか。そういうことがあるもんだから〔自分で診断を下すことは嫌がる〕。大学にまわされたときも、そうですよ。大学もはっきりしたことは言わない。で、「恵楓園に〔行きなさい〕」と。——そんなのは後でいろいろ勉強するなかでね、ハハアッて、思い当たる節だけど。

〔わたしは子どもだから〕「恵楓園」って言っても、全然わからんしな。あの時分は「癩病」って言ったんだろうけど、「癩」って言われてもわからんしな。まあ、しかし、近くにはおったんですよ、患者が。うちの親父と仲良しで、もうしょっちゅう、うちに遊びい來とったんだけどね。まあ、〔うつったのは〕そういうことだろうかなあ、っち思いよったけども。

いろいろ、療友たちの話を聞くとね、「もう〔おまえは学校に〕来んでよかよ」って言われて、ずうっと家に籠もったっていう人、けっこうおるんだけど。〔わたしの場合は〕全然それがないんです。〔ここに〕来るまでは〔友達と〕遊んでた。いよいよ熊本に行くぞっていうことになったら、「よかなあ。おまえは、汽車に乗って行くとだろ」ちゅって言うぐらいだった。〔そういう形で、けっきょく、友達に別れは〕告げてません。もう、早く行って、早く治して〔という考えだったから〕。当時のことだから、「なんさま早う、徴兵検査でも受けられるような体になろうや」っていう、おふくろの〔言葉〕。「あの医者は藪医者だけん、あれン言うことは、ほんとかどうかわからん」っていう、おふくろの恨み言葉ていうか、そういうことを途中でずうっと聞きながら。バス停まで1里も2里もあるからな、あんしたことを思い出すけどね。

大学病院に行って、〔家には帰らずに〕恵楓園に来たんですよ、直接。「そこに行け」ということでね。——そんなときはもう1人おったんですよ、一緒に、大学から恵楓園に来た子どもが。その子は、恵楓園で診察した結果、間違いだったんですよ。〔帰されて〕それっきり来ないから。

「すぐ入ったほうがよかろう」っていう、この恵楓園の人の言うことだったけど、おれがもう全然、おふくろと別れて暮らすなんてことは、とても簡単にはできないですよ。それがいちばん悲しかったわけでね、病気よりかなによりか。だから、「入らん」ちゅってから、サッサと逃げて。たまたまその御代志（みよし）駅に停まったら電車にサアアッと飛び乗ったけん。だからもう、仕方なしにおふくろも追うてきたけども。で、〔家に〕帰ってから、まあ何日かおったけど。——まあ、脱走じゃな（笑い）。そこらへん、竹藪がずうっと続いた。いまでも、あんときの風景は浮かんでくるな。フラッシュバックで。絶対に〔ここには〕入らんって思ったもんな。

〔大学病院に行く前に、家に警察官が来たことは〕まったくない。消毒とかなんとかいう話聞くでしょ、予防法なんか見れば。〔わが家にも〕後から来たんだろうか。そういうこともおふくろに聞く機会がないままだったけども。それから、学校で使いよった机なんか焼かれたなんていう話も聞いたりもするから、そういうことがあったんだろうかなあって思うけどもね、知る由もなかった。それっきり、全然、交流なかったからね。わからんまま。だから、どういふ差別がそこに生じたらうかなあって思うけど、確かめようがなかった。生真

面目に予防法通りやったんなら、大変なことだったはずだから。そこへんのこと、あんまりわからんわけです。

〔逃げ戻って、うちには〕何日おったろうかな。とにかく〔おふくろは〕「早う行ったほうがよかろう」っていうことだけです。必ず治るということを前提にね。やっぱ、「2、3年もすれば治るよ」っていうのが、決まり文句でね。そして、それこそ一人っ子だから、子どものときから跡取りっていうか、一家の戸主としての王道はな、ずうっと教え込まれるっていうかね。とにかく、「早よ治して、それらしいことができるような体に早よなろう」ということだから、深くはおふくろも考えなかった。「早う治して、早う帰ろう」って言うおふくろのね、やっぱ後押しですよ。その言葉だけでな〔もう一度、ここへやって来た〕。〔そのとき、おふくろは、おれが〕42の〔ときの〕子だから、53ぐらいですか。

二度目ンときも、もちろん〔おふくろに連れてきてもらいました〕。門のところにあった受付っていうかな、そこに仮の診察所みたいなどころがあって、そこで皮膚科の診断です。それこそ映画でも見るように、筆とか針で突ついたりする。それは大学病院でもあったけども。〔その時点で〕感じがあちこち痺れとったかわからんですね。しかし、自分では全然、自覚的な症状はなかったけども。〔そのほか、入所するとき、名前を偽名にしろということは〕聞いた覚えがない。〔ここでの名前は、ずっと本名です。解剖承諾書うんぬんの記憶も〕ないですね。

いまはそうでもないけど、当時、療養所の門をくぐると、変な臭いがしよったですよ。いま考えると、汽罐場から出るスチームの臭いだけどな。熱源が全部スチームだったから、どこ行っても蒸気が噴き出しとる。ほんなこって、いま考えても、異様な臭いがしてね。あれば、さつま芋の出来損ないみたいな臭い。それを覚えておるちゅうことと、入った晩の、一時収容所で配膳されたおかずがね、肉じゃがだったんですよ。当時は、肉を食いきらんでね、おれ。これでまず苦労してね。肉はもう、どういもんか、ずうっと、家におるときから食べきらんで。肉食うたら腹が痛(いと)なりよったから。「そういうことでは兵隊に行ってから困る」ちゅうことでね、やっぱ肉を食う練習をさせられよったんですよ。酒飲んで食べたら、腹が痛(いと)ならんじゃろちゅうことで。もう、物心ついてから、それ、ヤンですよ。だから、子どもンときから、酒飲んで。〔肉はダメでも〕酒は、あんまり二日酔いしたことない(笑い)。どっちかいうと、やっぱ、兵隊に行ってからが基準だったですよ、一つのね。何をするにしてもな。なんでも食べられんと、そんときに困るちゅうことで、一生懸命、肉を食う練習を〔させられた〕。

一時収容所っていうところがあって、そこで一晩泊ったなあ。〔おふくろも〕一緒に。一時収容所の世話をしとった人は、俗に「乾性〔らい〕」とか「神経らい」といった人で、顔がきれいかったけどね。足はあの、「トンネル下駄」っていうのを履いとる。鼻緒の下駄では履けないから、つっかけ。そんなのを履いとった。それから、手がもう両方とも「生姜手(しょうがて)」というかな。ほとんどもう〔指が〕こっから切れたような手でね。そんなんで、飯を運んできてくれたりしたから、やっぱ、ちょっと、気持ち悪かったよな。それでも顔はきれいかったけんね。あんまり恐怖(あれ)はなかったけど。

そして〔翌日〕、少年舎に入ったですよ。子どもたちだけおるところにね。

そこに、世話係の夫婦がおったから、一緒に〔おふくろが〕挨拶に行っただけ。〔子どもをよろしく頼む〕というようなことで。少年舎の世話係の夫婦は、L型だったからね。ちょっと、やっぱ、それは魂（たま）がったな。旦那のほうは、気管切開して、カニューレを入れとったし。そして、奥さんのほうも、それに間近いような人だったからね。

おふくろは、ちょっとショックだったろうなあ。そこに30分なり1時間なりおって、それこそ子どもば預けるもんだけん、いろいろ、一生懸命頼み事ばな、ああじゃこうじゃ言うてしよった模様ですよ。それに、言葉がね、田舎の言葉じゃと、方言が違うじゃないですか。うちのおふくろのいう言葉、世話係のほうがあんまり理解でけんごとあるふうでね。あとで、「なんば言いよつか、いっちょん、わからんじゃった」って言うた。だけん、もうあの夫婦（ふたり）だけは、何としても、いまでも許せんわけよ、わたしにはな。園内ではね、文化人として通つとる夫婦だったけど、あんなこと言いよったなって思ったら、もう腹立って、腹立って。

〔あの当時、付いてきた肉親が園の中へ入れたというのは〕考えると矛盾してるんですよ。恵楓園（うち）の場合も、いまで言う福祉課の隣に面会室っていうのがあって、やっぱ、そこから一步も〔中へは〕入れんような面会人もおったもんね。カウンター越しに〔入所者と面会〕。基本的には、こっちは「有菌地帯」でしょ。だから、とにかく健康者は入れない。まして、泊まるなんてことはえらいことだったんだらうけど。

〔入園した日は、1942年の〕9月のね——後から入所したときのカルテば見て、日にちははっきりしたんだけど——27日か。カルテには、病状は「軽症」ってしてあったからね。なんさま、子どもだったけん、あんまり詳しいことわからなかったけどもな。

〔少年舎での生活は〕やっぱ、慣れん生活だったけんね。そらあ、きつかったよな。いまの子どもたちならもう、それこそストレスだらけですよ。〔少年舎は〕あれ、何畳やったっけな。20畳ぐらいあったのかな。2室あったんだけど、子どもたちが20名ぐらいおったから、子どもたちは1つの布団に2人ずつ寝よったもんね、たいていな。

〔当時の学校の勉強？〕勉強は、普通の勉強だったですよ。〔村の小学校では〕4年5年つったら、軍事教練まがいのこと、まあ武道っていうか、木剣を振り回すとか、銃剣術の真似事をするっていうような、そういうとはあったけど、ここの恵楓学園に入ってからはそのようなことはなくて。〔当時はまだ、町の本校の分校じゃなくって〕寺小屋みたいなの。〔患者さんが教員をして。〕教室が2つだったけんですね、複々式かな。1年2年3年〔一緒に〕とかいう具合にして。自習の時間も、ずっとあったけんですね。〔カリキュラムは〕軍事教練みたいなやつがないだけで、あとはぜんぶ外のカリキュラムとおんなじだったです。教科書も、やっぱ、地域によって違うのがあったみたいだけども。まあ一応、ここ入ってくる時教科書も持ってきたけど、みんな間に合うて。

〔友達関係？〕やっぱ、子どもたいなあ、すぐ仲良うなって。〔部屋の掃除とか〕たいていのことは、自分たちだったな。それこそボタン付けとかなんとか、自分たちでしよったもんね。そぎゃんとも、おれの場合は、子どもときから教わりよった、なんでも〔自分で〕せにやいかんっていうことで。だから、あんまり不自由せんだったけど。やっぱ、そういうことしてましたよ、みんな子

どもがね。子どもたちが庭先で野菜をつくったりもしとった。洗濯とかなんとかはな、園に患者作業としての洗濯場があったりして[やってくれたけれども]。

[わたしが恵楓園に入所したときには、コンクリートの厚い] 塀は、もちろんあったです。あれは、昭和4年ごろ作られたけんね。で、少年少女舎っていうのは、その塀の外にあったんですよ、前は。いま、あそこに「隔離の門」[の跡]があるでしょ。おれたちは「裏門」って言いよったけど。あそこの近所から、ちょっと塀を切って、それからずうっと——当時の職員地帯だった場所だけど——あそこらへんクヌギ林だけん。トタン塀で囲ってね、そこに少年少女舎は造ってました。学校は、そこからずいぶん離れた、いまは「いこいの丘公園」っていうとこにあったけども。

[だから、子どもらにとっては] 塀を見るよりか、トタンの囲いを見るような感じだったですね。それでも、やっぱ散歩なんかすれば、ずうっとね、否応なく[コンクリートの塀を見せられることになります]。そして、おれが入った時分、昭和17年ぐらいは、西のほうの[のちに]「みよし寮」や「合志寮」っていう寮があったところへんは、クヌギ林だったんですよ。で、合志町と西合志町の境界線がそこにあったんですよ。だから、いまと全然感じが違う。

[わたしがここに来た当時、食べ物]は量り飯ではあったけども[まあ、ありました]。[お茶碗]一杯ですね。だから、子どもたち腹が減るから、雑炊っていうかな、汁の多か雑炊ですよ、そんなのをよう作って、食わせられよったけどね。[戦争が激しくなるにつれて] やっぱ、だんだん[食糧事情]は悪くなったよな。とにかく腹の減ることばかりやった。だから家のほうから、何か少しでもね、食べ物ば送ってくれちゅって、無心しよったもん¹。

戦時下の療養所生活

少年少女舎に、防空壕はあったかなあ。ちょっと覚えがないんですよ、それは。おれの場合、昭和20年の3月が高等小学校の卒業式で、一般舎に下がるんですよ。卒業式、少し繰り上げて早めだったけど。大人の寮に入ってからはない、防空壕掘りがありよったけどもね。

[ここに米軍の空襲があったのは] 昭和20年の5月ですけどね。それまではここは、あんまり飛行機も[来なくて]、静かなとこだった。[しかし、昭和20年5月の空襲では] 生き埋めになって[亡くなった人たちがいます]。おれがおった寮は「男14号」っていう部屋だったけども、隣が「男13号」だったんですよ。そこに、当時は、掩蓋壕(えんがいごう)っていうかなあ、コの字型に穴を掘って、それに丸太を通して、土を被せたり、カボチャを植えて、カモフラージュしてみたりするような壕だったけども。ただ穴を掘って、かぶせる[だけ]。[だから、爆弾が真上に落ちたらおしまいです。] なんの効果(あれ)もない。そうした防空壕のすぐ横に、20キロ爆弾が落ちてね。8名だったかな、生き埋めになっ[て2人亡くなっ]たんだけど。それが隣の寮だったですよ。それで、ほんとに戦争らしく——戦争らしくって言ったらおかしいけど、飛行

¹ 2012年12月の補足の語り。「[わたしは生家に帰省はしなかったけども、食べ物]の無心は] したです。おふくろは便りは書けないけどね、文盲だったから。でも、こっちからの無心[の手紙]、だれか近所の者(もん)に読んでもらいよったようですね。[そして] しょっちゅう[面会に来てくれました]。」

機がよう飛んでくるのが恐ろしくなった。それまでは、B29が空の高いところば、飛んでね。大牟田とか荒尾（あらお）とか熊本市内あたりは爆撃に遭うたけど、遠いところの話みたいにしとったけどね。やっぱその、5月13日っていう日を境に、ほんとに戦争が間近になったよな。隣の再春荘〔病院〕が直撃を受けてね、看護婦さんとか、7、8人死んだりしたもんだから。〔再春荘は〕結核の陸軍病院だった。〔病院だったけど〕近くに飛行場があったでしょ。そこに、ちょっとした小隊の守備隊っていうのがおったんですよ。そぎゃんとがな、艦載機なんか飛ぶと、やっぱ、小銃ば撃ったりなんかした模様ですよ。〔それが空襲を受ける〕発端〔となった〕。

〔わたし自身、当時は〕軍国少年。だけん、終戦のいわゆる玉音放送なんていうの、絶対信じられなかったもんね。たしか、年寄りのおじちゃんがおって、ホッとしたような表情（あれ）が見えたもんだけん、みんなでな、「この非国民が！」っていうような、言葉には出さんだったけど、「このじじいが」とかなんとか。もうそれは、一事が万事、そうでしょ。教科書が全部そうだし。で、国語を教えてくれた患者（ひと）が〔元は〕海軍の下士官だったけど。支那事変なんかに行っただ人。まあ、話の上手な人でね。その人のそういった体験談を聞くのが、教科書より面白かった。いつもそんなのをねだってね、聞きよったけども。

治療は、その時分は、大風子しかないんですよ。〔ずいぶん〕打った、打った。やっぱ、治りたい一心で。そらもう、いまの子どもたちなら、とてもじゃないけど、耐えきらんですよ。やっぱ、病気治したいっていう思いから。そして、あの時代だけん、みんな、耐えられたのかなあ。〔もう〕痛いどころの騒ぎじゃない。油性の液を打つから、注射の針も太いでしょ。一回り二回りも大きい。そして、ちょっと寒くなればすぐ白く凍るような、沸点の低いあれだから。それをもう毎日、子どもの小さな腕にな、筋肉のちょっとあるところを選んで打って。足のあたりにしたときはもう、そのままでは歩けんほど痛かったね。そして、これがなかなか吸収しにくいんですよ。おれは経験ないけども、やっぱ、吸収せんで、化膿してな、熱発したりして、切開をするっていう人がけっこう多かったですね。〔それでも効いてると〕信じざるをえないわな。それしか薬ないっていうことですから。

虹波（こうは）、あれは恵楓園だけです、たしか。ほか〔の療養所〕はしとらんでしょ。〔戦争中の昭和〕17、8年じゃなかったのかな。私の場合は、塗るほうだったから〔被害がなくて〕よかったんですよ。——注射がある。散薬（さんやく）がある。座薬がある。そして、塗るやつ。あれで悪うなった人が〔多かったというね〕。虹波をした人たちの骨は青かったって、聞きよった。実際見たことはなかったけどね。とにかく〔虹波を〕体内に入れたひとたちはダメみたいね。あれは、なんか、油と混ぜたような薬だったですよ。だけんね、この手足の腫れとつとには、かえってよかぐらいの。それでも効くだろうって思って、みんなしたけども。あれでやっぱ、だいぶ悪うした人もおっですよ。

プロミンで希望が蘇る

セファランチンは、恵楓園（ここ）はした人おらんじゃろうって思うけども。あれもだいぶん悪かったみたいですからね。やっぱ、なんべんか、そぎゃん新聞報道あったことあるですよ。『新薬現る』。その都度ね、効かんだったどこ

ろか、かえって副作用ばかりでね。ほとんどの人が悪うして。だから、プロミンという話があったときも、にわかになんか信じたんですよ。「どうせ今度もおんなじだろう」っち思ったね。しかし、おれの場合、その時分にはもう、病膏盲（やまいこうもう）の感じでね、かなり悪うなっとったですよ。入ったときに見た少年舎の世話係夫婦みたいに。——もう半年、プロミンなかったら、いまのおれはなかったでしょうね。そらもう、効いたどころの騒ぎじゃなか。薄紙をはぐようにつて言うじゃないですか、病氣治ることをね。薄紙どころじゃなか、段ボールば剥（は）ぐごと、よお治った。ほんとにもう、悪うなるときも、ほんなごて、昨日なんもなかったのに、こうやって顔でもなでてみると、プクッと結節が出たりしよったけど。今度は治るときもその反対で、「あら、今日は、なんもないな」って。

そして、やっぱ病気のせいでしょうねえ。もちろん栄養〔不足〕もあった感じだけでも。小学6年生のときから、あんまり身長は伸びなんだったんですよ。だからもう、部屋のひとたちから、なにかにつけて労（いたわ）られるつていうような状態だったけん。全然太らなかつたし。「チビチビ」言われよったもんね。だから、いまでも、昔のその時分のことを知ってる人たちは、「太ったなあ！」って。同級生なんかでも、高等科2年になつと、それ相当の大人の兆候つていうのが出てくるんですよ。そんなのも全然さ。おれがやつとアレになったのは、プロミン以後ですよ。精通たいな。そういったのを感じたのは、プロミン以後ですよ。

プロミン来たらもうね、それこそ半年間に5センチだ、10センチだつて伸びぐらいいね、伸びてきて。その時分におつた部屋の柱には、丈（たけ）比べじゃないけど、ずうつと身長測りよつた痕（あれ）があつただけどな。見事なもんだつたですよ。あの柱だけは欲しゅうくてたまらんけどね。

〔よく〕「戦前、戦後」つて言うじゃないですか。おれにとっては「戦後」よりも、やっぱ、「プロミン以後」ですね。療養所の〔めざましい〕変わり方つていうのはね。これはもういろいろ、文学する人なんかは書き残しとるけどな。

だから、プロミンを打つて、園全体がやっぱ明るくなるしね。個人的にもそれぞれ体力もついたりして、精神状態も戻つたもんだから、希望が出てきて。それがなかつたら、とてもじゃなかるうなあ。だから、プロミンをね、神棚に飾つたりしとつた療友もおるけども。まったく一変したもんね。入所者なんかやっぱもう、特におれたち、「結節らい」つていうか、L型つていうのは、すぐ傷ができてな、絆創膏だらけの顔とか、傷だらけの手足でね。やっぱ、いまでも思い出したくないような図ですよ、あれはね。それを考えると、まったく違いますからね。

〔プロミン獲得運動?〕あれは、全患協はまだできとらんやつたが、それでもね、プロミン獲得委員会つていうのを作つてね。うちでも、プロミン、希望者募つたんだけど、初めは〔たつた〕130名ぐらいだつたですかね。それほどやっぱ、新薬というのには信頼しとらんやつた。で、130名のうちから32名ですか。その分だけしか薬がないんですよ。そのなかにおれも入つたんだけど。それがもう、ほんなこて、1月2月経つか経たんうちにね、クルツと顔が変わつてくるもんだけん。あのとき、注射からもれた人たち、注射を希望しなかつた人たちも、そらあ異様つていうかな、治療棟の窓なんかほんと取りすがつてな。注射してほしいちゅうことでね。やっぱすごかつたですよ、それは。

東大教授の石館守三（いしだて・もりぞう）、あの人がね、〔日本でも〕初めて、あれば合成して、治験しようと思ったけど、多磨全生園、だれも〔手を挙げた者が〕いなかったちゅうもん。みんな痛い目におうちよるもんだけん。〔手を挙げたのは〕ただ1人。もうそれこそ自棄（やけ）っばちですよ。あの人の気持ちわかる、おれ。ほんと。もうダメモトで、おれなんかもやっぱ、希望したんだもん。もうどっちしたっちゃな。効かんで元々たいていうような感じでな、希望したわけだけど。〔全生園で〕初めて治験受けた人は、兵隊帰りだったらしいけど。気持ちわかるですね。まさに特攻隊ですよ。「おれ、してくれ」ちゅうこと。そらあもう、ほんなこて、神も仏もこの世にあったばいって思うような効き方だもん。もうあれで、やっぱ、ゴロリ変わりました。

それからです、ずうっと変わって。いろんな面でね。文化面にしても、生活面にしても、あるいは思想的な面にあっても、いわゆる民主主義の風ってのがどんどん入ってきたから。それまでは、体力もなかったが、そういうことを考える精神的な余裕もなかったですよ。だって、もう明日（あす）のことはわからんっていうような、日々であったもん。だからいま、こうして体験談として話すけれども、ああいう地獄絵図っていうのは、ほんなごて、誰にでも体験してもらいたくないし、あんまり聞かせたくもないような内容だけれども。しかしやっぱ、ハンセン療養所の歴史を語るとき、そういう一場面もあったっていうことも当然。だから、いまに残る偏見差別っていうのも、やっぱ、当時の病像っていうか、それを知ると人たちの頭からは抜けんでしょうね。そこから一步も先のほうさ、考え方として進んでくれんもん。それが一変するような時代になったっていうことをわかってくれんけん、困るんだけど。

患者作業としての付添看護

〔患者作業は〕いくつしたかなあ。10（とお）や15はしてますよ。とにかく、さっき言ったように、一般舎に入ったときも〔からだは〕弱かったから、一番の軽作業で、竹箒（たけぼうし）を持ってね、園内をずうっと、道路を掃いてまわる「外掃除」っていうのがあって。やっぱ、そんなことを、少しでも動けるならせんと、小遣いっていうか、葉書一枚出せないからな。

〔煙草？〕煙草は、その時分は吸わなかった。後で、少し色気づいてから。やっぱ、女の寮でも遊びに行くようになってからですよ。手持ち無沙汰になると、煙草っていうのが〔重宝だから〕、やったけど。

〔付添看護も〕しました。それは、元気になってから。あれはね、布団担いで行って。いまは、入院するちゅっても、ぜんぶ病棟に備え付けの布団でもなんでもあるけど。当時はもう、個人のやつを担いで。これは入院するときもそうだったけど、付添いに行くときもそうですよ。病棟あるいは不自由舎にも、夜具からなんか担いで行って。

だいたい1ヵ月っていうのが一つの区切りですね。まあ〔軽症患者が〕不自由者の付添いなんか行く時分は、行く人がおらんときは、義務みたいに寮を回るんですよ、順番が。そうすると、誰かと組を作つてな。だけん、おれの場合は、やっぱ、プロミン以前は、ほんとに細（こま）かったから。大バケツに水一杯抱えることもできなかったくらいだけん。元気な人とコンビでな、〔義務看護に〕出したりしてくれよったけど。そらやっぱ、人を看護するっていうこと、大変だったですよ。それと、治療棟の手伝い。〔それは〕いま、

看護婦がやってるような仕事ですよ。絆創膏を貼ったり、包帯を巻いたりね。それから、手術して、切断なんかすればさ、その切断した足を——いまは火葬場にやって丁重に取り扱うけど——、当時は土葬しよったから。で、野良犬が漁（あき）らんようにね、深（ふこ）う掘ってな、切断した足を埋めたり。妊娠中絶をした人の、後片付けっていうかなあ。まあ、治療なんかでもやっぱ、アバウトだったけんなあ。いま考えれば、そりやもうほんと、大変なとこだったですよ。死体解剖があれば、その解剖室の掃除なんかもね。

〔火葬も入所者がしていました。〕「隠坊（おんぼう）さん」ちって言いよったけど、〔それを専門的にやる係の人が〕いました。まあ、カネが一番取りよったろうな。一体いくら、でしよったから。

共産党細胞の一員に

〔昭和〕28年の予防法改正闘争のときは、〔わたしは〕まだ、なんていうか、ノンポリだったですね。あんまりそういう運動には関心なかった。それこそプロミンで、せっかく元気になったって、もう一生懸命遊んでばっかり。こっちのほうじゃ座り込みなんかしよるとね、友達何名かと一緒に、近くの川に蛍を見に行こうかちゅって。したら、〔自転車の〕無灯火でね、御代志の警察に捕まったりしたことがあった。そんな状態で、ぜんぜん闘争なんか関心なかった。——駐在が言いよったですよ。「おまえたちは、仲間が一生懸命しよつとに、どういうことか」ちゅうて（笑い）。

次の年、咯血して、結核病棟に10年ぐらい入院して。そして退院したのが、あれは東京オリンピックだから、昭和39年ですか。

〔それで、わたしが共産党に入党したのは〕60年安保のときですよ。隣の再春荘〔病院〕っていうのに、日患同盟があったし。当時の結核療養所っていうの、どこの療養所もそうだったけども、患者運動の組織があっけね、やっぱ、うちにもオルグで来たりして。そういうなかで、恵楓園にも「社会主義研究会」っていう会が生まれたんですよ。〔たまたま〕わたしがおった「男1号」っていう部屋に、その中心的な人がおって。その時分には、べつになんも感じな〔くて、わたしは入会しな〕かったけどね。まあ、その流れで。

もうそんなときは、結核は、一応、咯血が治まって、安静度も〔いちばん軽い〕5度、6度ぐらいなとったから、あちこち署名〔活動〕したりな。うん、そういうことするようになったけど。

やっぱ、恵楓園も医療の面でも非常に悪かったンですよ、その時分は。結核の治療にしても、そらもう、外では結核を撲滅〔したなんていう〕祝賀大会じゃないけど、たしか、それあったんじゃないのかな。ここは、ほんと、集団〔感染〕みたいにしてね、ぜんぶ、亡くなる死因が結核でしたね。だけん、こういうことでは、っていうふうなことで、医療改善っていうか、そういった運動なんか起こるようになったしね。

〔当時、恵楓園の共産党細胞は〕20名ぐらいおったですよ。〔そのまわりに『赤旗』の読者がかなりいて。〕その時分には、『赤旗』でもなんでもな、新聞〔の購読者獲得〕は、入所者の1割を目標に〔していました〕。まだ、全体的に〔ここの入所者には〕収入もないからね。よほどのあれじゃないと、新聞なんか読めるような時代ではなかったね。

〔看護婦さんの労働条件改善の〕「四四闘争」〔のときには、わたしたちが〕

支援ですよ。[労働運動のことで] いろんな相談っていえばね、[看護婦さんが] 入所者のとこに来てましたよ。それはやっぱ、それ以前ではなかなか考えられなかったことじゃないですか。そういった面での交流っていうのはね。

子どもを育てる条件を奪われて

[若いときは、結婚の] 機会がないことはなかったけども、そこまでいかなかったですね。やっぱ、途中で結核になったということで、軌道を外れたというような感じですよ。[つれあいと結婚したのは] おれが 38 ですね。

ここは[結婚即断種とは] 違います。ここはもう、昔からね、妊娠をした時点で中絶であり、断種だったわけですね。おれたちのときはもう、厳しく医者も言わなかったし。で、[不妊手術を] する場合でも、ほとんど、女のほうでしよったからね。男のほうの、いわゆるパイプカットっていうのは、せんようになっとったですけどね。

[おれたち夫婦にも、子どもは] できた。けども、中絶した。いま生きとれば、40 歳ですよ。やっぱ、中絶されても仕方ないか、そぎゃん思いだったねえ。どうせ[おれたち夫婦には] 育てる能力はないけん。それこそ、おふくろでもしっかりしとれば、そっちに育てさせるといふ方法もあったかしらんけど。人によっちゃあ、ほら、奄美[和光園] あたりへ行って、子どもを産んだりした[人も] おるけども。

うちのが話したかは知らんけども、[そのときも] いわゆる不妊手術はしなかったんですよ。やっぱ、それをするっていうことは、もう女でなくなるっていうかね、[そういう] 思いもあって。[どうしようかと迷いはしましたよ。] 妊娠とか出産っていうことは、たしかに体力的に無理しますからね。やっぱ、女のからだにとっては大きな負担になることだから。

[ここに夫が収容されたあと、妻が住み着いていた群(むれ)という集落が近くにあったか、ですって?] ありましたよ。あそこではね、韓国人の人たちがけっこう多かったけど。女性が多かったな。おれが「生活と健康を守る会」なんかをしてたときだから、[昭和] 40 年代ですよ。ほとんど、家族援護[金] を取ってました。[その手続きは] 自分たちです。わたしも、ちょっと、その事務の手伝いばしたことはあるけどもね。県の係ば呼んできてね、それにさせてな。[あと、まわりの農家の手伝いなんかも] しながらね。援護金だけではとても[やっていけなかったから] ね。たいてい、子どもを持ったりしとったからね。[そのひとたち] いつの間にかいなくなってしまうて。やっぱ、それぞれ子どもが巣立った後じゃなからうかな²。

² 2012 年 12 月の補足の語り。「生活保護ってありますね。ハンセン病の場合は、そういうのをあからさまにせんために、県直轄で[やりました]。福祉事務所なんかを通すと、地方自治体[の職員が知ってしまう]。知ってしまったは、やっぱり、家族のことがわかるから。それをせんために、県直轄のそういう組織、『生活と健康を守る会』ちゅうのをつくって。それは恵楓園独自のやつだったけどな。おれが[かかわったのは] 結核快方後だから、昭和 40 年代ですよ。そのころがいちばん盛んだったろうな。[わたしがやったのは] 事務の手伝いのようなこと。とにかく、福祉事務所です生活保護の基準っていうの、やかましいんですよ。認定基準なんかがあつてね。だけん、そういうことをなるだけカバーすることもあるし。やっぱり、らいつていう病気をあまり喧伝(けんでん)されないようにね、わからないようにというこ

〔あの時代、夫婦の一方がこの病気になると離婚した人が多かったわけだけど〕なかにはいろいろあって。いま言ったように〔別れないで、療養所の〕内と外におった人もおるし。なんていうか、生活力のある人は、健康な奥さんばね、〔所外労働で出た〕現場で見つけて、夫婦になるっていうような人、子どもを連れた人なんかと夫婦になるっていうような人も、けっこうおったから。

母の死の直前に初めて生家に帰る

〔実家には〕全然帰ってないんですよ、おれ。——それはどういうことなのか〔って、自分でも考えるんです〕。もちろん、あんな厳しい予防法があるちゅうことなんか全然知らなかったけども、とにかくもう〔ここに〕入ったら帰れないんだっていうことが〔わたしの中に〕こびりついてたんですね。どこをどう通じて植えつけられたのか知らんけどもね。やっぱ、そういうことだったんじゃないかと思うな。

だから、いまから 30〔数〕年前になるけど、おふくろがもう年取って、具合が悪くなったときに、近くで面倒みてくれよった人からね、連絡があったんですよ。その人がまた、どんだけ予防法なんていうとを知ったかどうか知らんですよ。でも、これ、たとえ連絡をしたところで帰られるはずもないからどうしようか、ちゅうことで、だいぶん悩んだらしいです。たまたま、恵楓園（こっち）に勤めとったお医者さんが、うちの町で開業しとったもんだけん、その人に相談したら、その時分はだいぶん緩やかになっとたけんですね、「そぎゃんことは言うたらんで、早よ連絡してやんなさい」ちゅうことで、わたしに〔連絡が来た〕。で、そのとき初めて、生まれた家の敷居を跨いだんですよ。〔1979年のことです。〕

〔わたしたちが訪ねたとき、おふくろは〕かろうじて、わかったんだろうっち思うけども。うちの〔桂子〕も一緒に行つて。だけん、うちのもの、初めて〔わたしの母親に〕会うんですよ、一緒になってから。たら、〔おふくろの目から〕涙がスーッと落ちたからね。寝とつてね。だけん、ひよつとしたら、わかったかなあと思つて。いまそれを、ひとつの〔心の〕支えにするけども。ソンとき初めて帰ったんですよ。もう、だから、出られない、帰れないっていう、子どもンときからの〔植えつけられた〕意識（あれ）がずうっとあるんでしょ。不思議なもんでね、どんなに後遺症のない、健康者みたいな病人であつても、門を一步くぐつたら、しまい。もう外に出るのが、怖いんですよ。あそこくぐるまでは、なんのことはない。電車なんかも、そぎゃんして勝手にな、飛び乗ったりできよつたのに。それができなくなるンだもんね。あれ、みんな言いますね。やっぱ、そういうことが知らん間に、植えつけられてしまつたんだらうなあ。いまぐらい知恵があるならねえ、もうちよつと〔なんとかできたんだけど〕。

〔わたしは〕“優良患者”だったんですよ。ここは、そういつた表彰があつたんですよ、園長表彰が。永年勤続じゃないけれども、3年とか5年とか、それこそもう、巡視の世話にならんだつたような人たちは、そぎゃんして表彰しよつたもんね。そういう面じゃ〔わたしは〕非常に優良患者だったけん、あのプロミンの抽選のときも、選ばれたんじゃないかろうかなつて、自分で思つたりす

ともあつたりして。まあ、直轄でそういう組織をつくつてね、やつてました。」

るけど（笑い）。

ほんと、だけん、予防法が弾力的運用がなってからも、よう、家の近くまでは行くけど、どうしても家に着ききらなかったもんなあ。そんなときは、遠い縁家内（えんかうち）が、うちの家に間借りしとったもんだけんな。間借りっていうかも「跡を取るみたい」な形で。まあ、おふくろを面倒みてくれるならよかたい、っていうような思いで「自分なりに」納得（あれ）したけども。その代わりもう、迷惑をかけやせんじやろうかっていう思いばかりがあつてね。やっぱ、家には一歩も寄りつけなかった。いまぐらいの考え方ならな、そんなのを押して、行とったはずだけど。それができなかった。おふくろの死に目には会ったけども、死に水をとるっていうことまでできなかったしな。やっぱ、残念ですよ。

「会いに行ったあと」1週間ぐらいして、亡くなったっていう「連絡がありました。もう一度、実家に行ったのは」死後の祀り事が済んでからですよ。もう、人と会わんでよかような「時期に」。隣近所者（もん）なら、おれが恵楓園（こっち）来とるちゆうことは、知りすぎるほど知とるんだけどな。それでも、やっぱ、行けなかったもんね。

だけん、「去年、故郷の南小国町で講演をしたのは」島崎藤村の『破戒』じゃないけども、丑松（うしまつ）の心境でな「ずいぶん葛藤しました」。ほんと、かわりのある人は、もう、いっちゃん、おらんとばってんね、自分の気持ちとしてそうだったです。でも、故郷で講演をしたことで「なんか「もういいわ」っていうような、そういう気持ちにはなりましたね³」。

「最近」近くの小中学校から「子どもたちが先生に引率されて、ここに勉強に」来るんですよ。だけん、たまたま、わたしが「生徒たち相手の」話に出るときは、そこへの近所のことは、それとなく「あの場所はどぎゃんなってか」とか聞くだけど。「じつはね……」っちゃ「自分からは」なかなか言えなかった。そしたらやっぱ、小学校の先生なんか転勤があるもんだけん、近くの小学校に転勤して「きて」、自分もあんたとおんなじ小学校の出身です。なんちゅって言う人なんかもおったりするけどな。なかなか言えなかったもんね。

「講演の」帰りに、新聞記者と一緒に「自分の通った」小学校に行とったら、たまたま、下級生だったという人がそこに来とってね。「さっき講演された方でしょ」ちゅって立ち話をしたけど。いろいろやっぱ、学校のことば話せばな、懐かしかったですよ。

「赤旗全国囲碁大会」に参加

「囲碁はアマ」6段です。ハンセン療養所は、ずっと日本棋院の支援を受けとったけん、免状なんかでも格安だったんですよ。実力は、まあまあ、どうかわからんけど。

「碁を始めたきっかけは」結核病棟を退院してからすぐ、自治会事務所に書

³ 2012年12月の補足の語り。「スッキリしたっていうか、胸の一物（いちもつ）が取れたような。やっぱ、なんか、隠し事をしとるといようなわだかまりといような。いろんな啓発のお話なんかせんならよ、そぎゃん気持ちにならんだっとうけどな。自分が隠し事をしとったっちゃ、これは、やっぱ「よくないんじゃないか」。そんな思いから、そぎゃんとが取れたっていう意味ですけどね。」

記で入ったんですよ。当時は、碁将棋会っていうの、けっこう賑わいよったもんだけん。たまたま〔事務所の中に〕打つ人がおって、「じゃあ、おれたちで事務所クラブば作ろう」っていうことでね。そこがきっかけです。あの時分から何十年なるんですか。もう、40年ぐらいになる。それこそ、牛の糞（くそ）も段々じゃないけれども〔強くもなりますよ〕。——馬の糞（くそ）はバラバラ。馬は歩きながらするから。牛は固まってするわけ。

〔たしかに、飛躍的に強く〕なる時期はあったですね。「ある日突然強くなるよ」って、日本棋院の石毛嘉久夫（いしげ・かくお）という七段のプロの先生が〔言われました〕。あの先生が、いつも大会のときは来てくれた。もう亡くなったけど。それこそ、自費でね、来て。毎年の、療養所の全国囲碁大会の場所には、必ず来てました。自分の弟子なんかも連れてね。そこで優勝したら、指導碁（それ）がご褒美ですよ⁴。

〔1994年には、赤旗主催の大会で〕県で優勝してね、〔県〕代表で〔東京の日本棋院でおこなわれた全国大会に出ました〕。あのころは調子が良かった。〔それ以上に〕運が良かったんです。トーナメントだから、ほんなこて、運ですよ。恵楓園（ここ）には、まだ、それこそ〔熊本県の〕朝日十傑なんかに入る人が2人ほどおるからな。その強い人がまちごうて負けたりしたからな。

〔囲碁は〕いまもしてますよ。暇なときはもう、昼から〔園内の〕碁会所に行って。〔しかし〕いま、入所者ではほんと10名ぐらいしかおらんのですもん、碁会所に来る人は。〔その代わり〕市内からね、福祉囲碁の会の人たちが大挙して来てくれる。〔その人たちも〕けっこう強い。恵楓園に来てから、みんな強うなったですよ。

あれは、〔昭和〕42年だったかな。まだおれ、碁〔を〕打ってなかった。〔誰でも参加できるはずの「朝日十傑戦熊本県大会」への参加を、恵楓園入所者を理由に拒否されるという事件が起きた。〕だいたい、そういったことの啓発を進めにゃいかん立場の、天下の朝日新聞がな。たとえ〔一般の〕参加者が〔何を〕言おうともな、それを〔説得しなきゃ〕困る。まあ、仲介する人がおって〔問題は解決しました〕。県でも〔碁が〕いちばん強く、また社会的にも肥後銀行の常務というような人が〔あいだに入ってくれて〕。その人の一統がおってな、そんな人たちを引き連れて、「じゃあ、自分たちが相手しよう」というふうなことから、開けてきたですよ。どんどん〔ここに〕強い人たちが来てくれるようになったし。

NHKの「療養文芸」が楽しみだった

文芸〔のほうを始めたの〕は、結核病棟に〔昭和〕29年に入院したその時分からですね。やっぱ、おんなじ結核で入院しよった人が、短歌を作りよった。伊藤保っていう名前は聞いておるかは知らんけど、あの人なんか入院しとったし。まあ、いろいろ詠み方、花鳥風月もあるだろうけど、おれなんか、文句ばっかり言うような短歌しか作れんけども。

〔NHKの〕「療養文芸」っていうラジオ〔番組〕が、毎週あってね。それは

⁴ 『エッセー集 連理の枝』の箱に入った杉野かほる『日々を綴りて』には、優勝楯をもらう杉野芳武さんの写真が収められている。そのキャプションには、「第15回ハ氏病囲碁選手権大会に出場し個人戦で優勝（昭和55年於長島愛生園）」とある。

もう、短歌をはじめ、コント、詩、川柳、俳句な、そんなのがあったから。で、よか小遣い稼ぎにもなった。採用になると、いくらかもらいよったから。そんなことで趣味と実益を兼ねて。あの時分は「療養文芸」っていうのは、一般の、結核療養所なんかでも盛んだったね。そのとき一緒にしよった人が、ほら、〔大島青松園に〕塔和子（とう・かずこ）さんっておるでしょ。あの人なんかもその時分に始めた人ですよ。

予防法廃止と熊本地裁勝訴

〔1996年に「らい予防法」が廃止されたわけだけど〕廃止ということはぜんぜん頭になかったですよ。そのとき〔自治会の〕役員しとったけども、一般の〔入所者の〕中ば、ずっとまわると、やっぱ、改正っていうことではみんな理解するんだけど、予防法を廃止するっていうことについてはな、ぜんぜん、みんな、そういう発想（あれ）はなかったんじゃないですか。俗な話だけど、予防法に守られとって〔いまの生活があると〕そういう気持ちがあったですよ、一般〔入所者〕の中には。だけん、「もしも、おまえたちがそぎゃんことばしてから、少しでも〔処遇が〕悪うなることあったら、おまえでも袋叩きじゃ」て言われよったもんね。そのくらい不安だったです。まあわたし、個人的にも、確信は持てなかったもんね。しかし、いまの時代だから、そうむちゃくちゃになることはない。——それは、裁判のときだってもそうだけど。〔わたし自身は〕原告にはならなかったけども、積極的に応援はした。もしも負けたらっていう気持ちは、そら、どこかにね、あっても、しかしむちゃくちゃなことにはならない。いまの民主主義の時代、支援者もいっぱいおるような時代だからな。そういう確信をもって、積極的に応援もしたけど。予防法廃止のときも、そぎゃんだったですよ。

〔じっさい、予防法廃止になっても〕べつに、なんもなかった。気分的には、ほんなごて、なんかシャッポがとれたみたいで。そら、あの予防法っていうのは、弾力的に運用とは言いながら、やっぱ、条文にちゃんと書かれてある。あれを見れば見るほどね、おれたちは正確に言えば法律違反ばしとるんだなあっていうようなね、変な拘泥（あれ）があって。で、仮に、外で、そのことを突かれればね、何にも言えないっていうのが、やっぱ法律だったですよ。それがもう、胸を張って、それに反論できるんだということからね、晴れ晴れとした感じだったです。〔わたしは〕アマチュア無線もするんだけど、やっぱ、それまではあれですよ。いつも、外出証明書、1年分とって、出よったもんね。なんかのときの〔ために〕⁵。

〔1998年7月の熊本地裁への提訴は、最初に原告になった人たちが〕個人的にやったことだからだけん。いま振り返ってみるとね、自治会には一言も挨拶（あれ）がなかったもんでね。「こういうことするよ」って、一口ぐらいあってもよかったっちゃないかなって思うけれどもね。ぜんぜん、話〔が〕なかった。

⁵ 2012年12月の補足の語り。おつれあいの桂子さんも同席されていた。

《芳武》〔無線器を〕車に積んで移動して回ることもある。家にもあるしね。

《桂子》固定もあるけど、移動によく〔使った〕。いまのように携帯〔電話〕がない時代は、道を聞いたりするのにとか便利だった。「いま、ここ行きたいと思うけど、道、混んでますかあ？」とか、「どの道を通ったらいいですかあ？」とか聞いて。

〔だから〕自治会の体制としては〔裁判に〕反対だったんですよ、正直言って、恵楓園の役員は。

まあ、しかし、〔わたしとしては〕やることに間違いはないからちゅうことで。うん。国を訴えたっていうことはね。やっぱ長い間、ああいう法律を続けてきたということについては。だから、そこではもう積極的に、わたしは応援しとったけれども。しかし、もうちょっとうまくやればまた、原告も、もっとスムーズに増えたはずだけでも。まあ、それは星塚〔敬愛園〕でも言われることだろうけどもね。なんか知らんところで進んだっていうような……。当時の自治会の幹部たち、そぎゃん思っとるのもけっこうおったんじゃないかなあ。なかなか、そこらへんがむずかしい問題（あれ）があったんですよ。で、裁判で熊本地裁にみんな来れば、けっきょく、うちの面宿に泊まったりするじゃないですか。いちいち、なんていうか、目を付けたちゅうかなあ、「なんで泊まっとるけ」とかなんとか⁶。

〔2001年5月の勝訴判決は〕やっぱ嬉しかったですよ。当日は現場に行っただけ。そらもう、あの裁判あってから、毎週行きよったんです。そんなときは常任委員会に入ってね、〔自治会役員のなかで〕わたしだけだったもん、行くのは。原告じゃなかったけど。

〔ずうっと裁判に行ってたから、勝つと〕思ったですよ。やっぱ道理がな、通ったし。国側の言うのは、ちょっと無理なことがいろいろ出てきたものだから。

〔原告には最後までならなかったけど〕勝ってから入るのはなあ、なんか格好悪い。勝ち馬に乗るようで（笑い）。

黒川温泉事件で入所者を支えてくれたのは小中学校の子どもたち

〔黒川温泉事件が起きたのは2003年。〕あのときは〔わたしは熊本県の里帰りのメンバーに〕なってなかった。なんかの都合で希望してなかった。

あれ初めて聞いたとき、あ、やっぱりな、また起こったかっていうような感じですよ。あんな大事（おおごと）になるっちゃ思わなかったし。それまでも、ちよいちよい、さっきの朝日〔新聞社〕の暮の話じゃないけど、あんなことしよちゅうあったからね。だから、ああ、また起こったなっていうことぐらいだったんですけどね。

⁶ 2012年12月の補足の語り。

《芳武》けっきょく、そのときの状況っていうのは、全療協の方針として、「裁判は静観する」ということだったでしょ。実質的には「反対」。自治会の役員たちがそぎゃんふうだったけん、県外車みたいなね、見知らぬ車が停まると、目を付けてですよね。裁判の支援で来とるんじゃないかというふうなことでも、いちいちチェックしよった。「一切、中立だから」というふうなことで、裁判は支援しないという〔態度でしたな〕。

《桂子》だから、みんな〔面会人宿泊所には〕泊まらなかったですよ。だけん、わたしたちの面会人〔ということ〕で泊めてやったりしよったです。

《芳武》遠いところから来とったっちゃ、そぎゃんしてな、泊まらせんような風潮があった。

《桂子》家族の面会に来てるひとがいるんですよ。その車さえ、「あれ、なんで来てるか」ってなるんですよ。

いちばん気にしたのは、黒川温泉っていうのがやっと全国的にね、名前がポピュラーになってきとるとにな、こら、困ったなあ、水差すようなことになりやせんだろうかなっていう気持ちだったですよ。だけん、宿泊拒否したホテルにすぐ行ったんだけどね。抗議するっていうよりも、なんとか理解してもらいたいっていう一心でな。[わたし自身が]行きました、録音機持って。[ところが、いくら話しても]ぜんぜんもう、わからない。「側(がわ)の客(ひと)に迷惑をかける」っていうことだし、それから、「拒否は本社の意見だから」っていうふうなことでね、もうそれ一本ですもん。これじゃあ、どう話したっちゃ仕方ないなて思って。せめてね、「今年は日にちが迫ってって、どうもならんけども、また来年でも考えてみましょうかね」ぐらいの話になってくれれば御の字だって思ってただけけど、「ハンセン病患者〔を泊めるのは〕反対だ」っていうこと、一言だもんだけんな。これはもうどうしようもないと思って帰ってきたんですけどね。

そげん言うとして、こんだ「謝罪に行く」って言い出したでしょ。ほんとに謝りい来るなら、ここの自治会事務所で受けるはずだったんです、挨拶を。もう、こっそりってというか、謝罪を受けて、それに対する言葉までね、[自治会の]会長は準備しとったっていうようなことだったんだけど。マスコミが来るっていうことが伝わってきたもんだけんな、これは大変だと。それじゃこの事務所に入りきらんばいということで、急遽、場所ば「やすらぎ総合会館」に変えたっす。[そしたら総支配人の挨拶が]謝るところの騒ぎじゃなかですもん。「本社の命令じゃ。社長命令じゃ」っていうことで、ずうっと断っておきながら、当日はな、「わたしの理解不足だった」と。「それは話が違うんじゃないか」ちゅうことになってね、あぎゃんなったですよ。その模様が、全国放送になったもんな⁷。

⁷ 2012年12月の補足の語り。

《芳武》前には「社長命令」というか「本社の判断で断わった」って言いながらな。[ここに]来たときは、「お断りしたのは、すべて自分の判断でした」ということだな。[それじゃ]トカゲの尻尾切りじゃないか、なんて言って[批判]したんだけど。《桂子》それに対して、入所者の側が強く出た場面が[テレビの全国放送で]映ったものだから。そこだけ。

《芳武》まだ、あんどきも、社長の言葉としてな、「すまんだった」っていう一言でも出てくればよかったんだけど。現場の責任者[として]、ある意味であの[総]支配人も操られてな、かわいそうじゃった。そげんことになったもんで、問題がだんだん[大きくなった]。

《桂子》また、あの社長さんも、クルクルクルクル、変わったもんだからね。謝るとか、[全国のハンセン病療養所へ]行脚してみたりね。[それでいて]ホームページではいろいろ言ってね。——夫(このひと)も、だけん、いちばん辛かったのは、自分のふるさとだったからね。余計ね。

《芳武》まあ、あぎゃんとのおかげで、うちの町はもう毎年、[啓発を]やることになったんですよ。

《桂子》学校を挙げて、あれから毎年[恵楓園に]来るようになって。町でも[啓発を]するようになってね。だいぶん進んです。

《芳武》黒川温泉ついたら全国ブランドに、ちょうど右肩上がりのときだったもんだけんなあ。やっぱ、心配したんですよ。

《桂子》熊本県が「今年[の里帰り]はどこにしますかあ？」ちゅって、相談されに

そのあとの〔われわれに対する〕誹謗中傷がな、これはもう、ほんとに耐えられなかったですよ。電話で言うてくれば、〔こっちの話を素直に〕聞く聞かんはべつとしても、話せるんですよ。ところが、ファックスとか手紙なんかで言われると、一方的でしょ。これにはもうどうしようもない。言葉のかけようがないもんだけん。やっぱ、電話できた人たちは〔わかってくれたひとが〕何人かおったですよ。「いや、そういう事情はぜんぜん知らんもんだけん」っていうことでね。けっきょくやっぱ、歴史的にそうだろうけど、何事も隠そう隠そうですつときたっていうのが、ハンセン療養所の事柄でしょ。だから、なんも知らんわけですよ、正直言って。昔ながらの病像観っていうのが、みんなの頭にこびりついてね、それに基づいてってな、「おめえたちは当たり前な顔をしとらんのに」とか言うて。個人の名前を出して悪いけど、〔群馬県〕草津の〔栗生楽泉園〕あの人、桜井哲夫さんなんかの写真ばね、わざわざ切り抜いて、ハガキの真中にベターっと貼ったりして。もう、そらなあ、たまらんだった。しかしもう、ほんなごて、そういうあれしかないですよ、やっぱ、偏見っていうかな。昔の病像観っていうのが、もう頭にあって、それが全然やっぱ……。だけん、おれ言ったことだけど、「無癩県運動は国をあげてやったことなのに、やっぱ、その啓発もな、それに匹敵する、あるいはそれ以上のことをな、やってもらわんと」っていうふうなことを、お話ししたんだけどね。それが全然、啓発とかなんとか言いながら、実際には、なされとらんもんだけん。あれはもう、そのほうがきつかったですね。

〔自治会にがんばれっていう励ましの言葉も〕入った、入った。入ったのはあれですよ、別府のね、子どもたちですよ、小中学生。それがもうね、担当の先生はもう癌で亡くなったけどね、寄せ書きとかなんとかで〔がんばれっていう〕言葉を寄せてくれたけど、あんなのがなかったら、ほんと、まいっとったな。そら嬉しかったですよ。もう、そんなときは、だいぶん啓発とかなんとかかって、もう4年も5年もしてね、ちょっとは知られとるもんでいう、ある程度の自負なんかあったんだけど。そんなもん、糞喰らえだったもんね。あ、世の中って、こんなもんかって思ってね。がっかりしちゃったんだけど。子どもたちの支えが、ほんとに。やっぱ、素直にわかってくれば、こういうことになるんだなって思ってね。だけん、「大人はあんまりあてにはならんばい」ちゅってから（笑い）。やっぱ、いろいろ汚染されとるけん。先入観もってる人は、やっぱダメだ。

来るんですよ。そんなとき、黒川温泉っていうの、有名なとこだし、一回泊まってみたいなあっていう気持ちで、「じゃ、黒川温泉に」って言ったら、いつも〔は〕10名いないのに、20名以上希望者がいたんですよ。だから、県がね、予約したんですよ、黒川温泉にね。

《芳武》だって、あのホテルしか場所がないんだもの。

《桂子》おっきな、たくさん泊まれるところはね。

《芳武》せいぜい10人も泊まればいっぱいのホテル〔ばかり〕でしょ。それぞれの藁家（わらや）を改善したような温泉場だものな。ほんと、昔の湯治場です。それはもう、浴衣がけでウロウロして回れるようなな。

《桂子》鄙びたとこね、ももとは。みんなねえ、タライ抱えて歩いてるもんね。あっちの温泉、こっちの温泉って。入湯（にゅうとう）手形がもらえてね。……〔あのホテルの跡〕いまは駐車場になってしまっただけ。

I Returned Home for the First Time When My Mother Was Dying: Interview at Kikuchi-Keifūen, a Hansen's Disease Facility

Yasunori FUKUOKA & Ai KUROSAKA

This is the life story of a man in his 80s living in Kikuchi-Keifūen, a Hansen's disease facility.

Mr. Yoshitake Sugino was born in March 1931 in Kumamoto prefecture and sent to Kikuchi-Keifūen on 27th September 1942. He was 11 years old and refused to enter the facility when his mother brought him to Kikuchi-Keifūen. He ran away but came to the facility with his mother again to 'enter the gate.' He said that he was scared to go out. He revisited home after hearing the news that his mother was in a critical condition in 1979. It was the first time for him to return home since entering the facility. There was invisible power to disturb him to visit home for 37 years. It must be the Segregation Policy which affected Hansen's disease patients' lives in the leprosy facilities.

Even after the unconstitutionality lawsuit against the Segregation Policy was decided in favor of the plaintiffs by the Kumamoto district court in 2001, there was an incident at a hotel in Kurokawa hot springs in which people from Kikuchi-Keifūen were refused entry, in 2003. The town was Mr. Sugino's home. We were able to hear the details because he was involved in the arbitration for this event as an executive member of the resident association of Kikuchi-Keifūen. The general manager of the hotel visited Kikuchi-Keifūen to submit the 'apology statement' but the resident association refused to accept it. This scene was aired by the national broadcasting network. Subsequently, masses of letters and phone calls criticizing the people in Kikuchi-Keifūen rushed in. According to Mr. Sugino, the general manager had claimed that rejecting the Kikuchi-Keifūen people was the hotel president's decision when Mr. Sugino and his colleague visited the general manager at the hotel. However, the manager changed her word when she came to the facility, saying that the manager herself decided to reject the people. All members in Kikuchi-Keifūen could not see even a tiny piece of sincerity from the 'apology.'

This interview was conducted at the resident association office of Kikuchi-Keifūen on 15th March 2011. Interviewers were Yasunori Fukuoka, Ai Kurosaka and Kaori Adachi. Mr. Yoshitake Sugino was 80 years old at the time of the interview. Mr. Sugino published the essay book *Renri no Eda* with his wife Keiko Sugino. He is a skillful 'Go'

player with a rank of amateur six-dan, and joined the national Go tournament hosted by Akahata as the representative of Kumamoto prefecture. He is also a man of other talents who enjoys composing thirty-one syllabled verses, writing essays, and operating a ham radio.

The interview script was approved by him on 8th December 2012. When we revisited Kikuchi-Keifūen in July 2014, the schedule board in the resident association office displayed that Mr. Sugino worked as the speaker of the explanation of Hansen's disease for young students as Mr. Masahiko Inaba, the vice president of the resident association. The strong determination to abolish the discrimination on Hansen's disease motivates their activities.

Keywords: Hansen's disease, Segregation Policy, life story